

◇特集 座談会◇

「行ってみたい学校」

「行かせたい学校」の要件

―学校法人同志社の中学校、高等学校教育―

私立学校が開発し、特色ある教育モデルとして定着した中高一貫教育を公立学校も採り入れ、関心を集めています。補助金の配分基準、高校入学定員の公私比率の見直しなど、中等教育は少子化、行・財政改革の渦中にあります。

座談会では、学校法人同志社の中学校・高等学校が実践する教育の「これまでとこれから」を話し合いました。

発達段階に応じた独自の教育を行う同志社中学校と高等学校

高田●今日は学校法人同志社の中学校、高等学校の先生に、各校が実践している教育の特長や将来像などを話し合っています。ただき、「行ってみたい学校」「行かせたい学校」

い学校」としての魅力を引き出してみたいと考えています。まずは現行の教育課程についてお話しいただきましょう。同志社高等学校の山崎先生からお願いいたします。

山崎●本校の場合はコース制のないカリキュラムが特長です。中学から高校へ進

高1・高2でいろんな必修科目を十分に勉強した後は、高校3年でバラエティに富む選択科目を学び、とことん一つの探究活動を進めていくやり方も、長年にわたって蓄積した成果をもとに今後さらに進めていきたいと思っています。同志社大学への推薦枠を持った学校としては、単に受験勉強のための知識だけでなく、判断能力、情報収集能力、発表能力を、探究活動の中でさらに着実に身につけていくことが、大学での学力を伸ばす中で非常に意味がある。2010年の統合後

は、中学校と一緒に6年間を見渡す中で、中学校ではどんな基礎を身につけ、さらにそれを高校で受け取り発展させるのかを、他の中・高校の6年間の教育も学びながら考えていくつもりです。新しい設備も含めて、新しい教育を進めていきたいと思っています。

高田●高校と統合される中学校の竹山先生、いかがですか。

竹山●同志社中学校は、国の重要文化財となっている彰栄館やチャペル（同志社礼拝堂）を中心とした同志社発祥の地で、

む段階で文系・理系という特殊な分け方をするのではなく、高校1・2年で文系も理系科目も学んだ中で新しい発見をして、自分の進路を切り拓いていくことを何十年にもわたって行ってきましたし、これは今後も大事な教育ではないかと思っています。

出席者

山崎 敏昭
高等学校教諭（教頭）

松延 貴司
香里中学校・高校教諭（入試委員長）

長安 晃
女子中学校・高校教諭（入試対策部主任）

坂下 淳一
国際中学校・高校教諭（入試センター主任）

竹山 幸男
中学校教諭（教頭）

司会

高田 芳樹
大学企画部企画室長、法人部一貫教育調整課長、大学一貫教育推進課長



山崎 敏昭
【やまさき としあき】
高等学校教諭（教頭）

創立者新島先生の願った教育を実現できるようにという思いで教育活動を続けてきました。本校は創立以来、学力と人間性の両面を大切にした教育を行ってきました。中学生時代は「第二の誕生」と言われるように、自我に目覚め、身体的にも精神的にも子どもから大人に大きく変化していく時期です。その思春期を迎えている生徒たちにふさわしい、さまざまなプログラムを用意し、その展開に工夫を凝らして日々の教育活動を実践しています。

高田●学習指導面では、特にどんな点に重きを置いておられますか。

竹山●基礎学力をつけることと、知的好奇心、探究心を育てることですね。それぞれの教科が到達目標を定め、基礎学力はもちろん、学習指導要領の枠にとらわれない独自のカリキュラムを作成して、ときには高校や大学の内容も取り入れながら、より広く、より発展的な内容も学ぶことを通して、思考力と想像力のある豊かな学力の形成をめざしています。生徒たちは定期テストや小テストだけでなく、レポート課題や発表も各教科で多数



竹山 幸男

【たけやま ゆきお】

中学校教諭（教頭）

行っています。到達目標に達しなかった生徒には教科の補習を状況に即して行い、学期ごとに2回行われる指導会議では教科担当者が集まって、一人ひとりについての長所や短所、現在の到達状況などを多角的に分析し、最善の指導方針を立ててサポートしています。06年度からは1クラスを40人から36人にして、生徒一人ひとりに対してよりきめ細やかで行き届いた教育ができる環境を実現させました。

中学生時代に、自分はどんなことに関

心があり、将来大学で何を学びたいか、何になりたいかなどを広く考えてほしいと思いますし、小学校時代に気付いていなかった自分の潜在能力も発見してほしいと願っています。中学校では、各教科の専門の先生が教科の内容をいかに魅力的に分かりやすく伝えるか、「本物」と出合う場面をつくるかということが重要だと思います。

高田●具体的にいろいろなユニークな取り組みもしておられると聞きますが。

竹山●本校には、約20にもおよぶ教科特

別教室があります。理科には、物理、化学、生物、地学の四つの実験室があり、すべての授業を実験室で行うため、授業のほぼ半分が観察・実習・実験です。1年生全員による「カエルの解剖」も本校の伝統ですし、社会科の「政治」の授業では、裁判員制度が実施される以前から憲法学習を中心に民法や刑法も一部学習し、実際の裁判を傍聴したり模擬裁判を行ったり、ロースクールを見学してきました。英語科では1年生を中心に18人のハーフサイズ授業を行い、基礎学力とともに、発音や会話の授業の充実を図っています。数学科では、同志社大学の理工学部、生命医科学部の研究室訪問、国際科学技術振興財団主催の、大学の第一線の研究者を招いて行う「やさしい科学技術セミナー」も実施しています。生徒たちの知的好奇心、探究心を具体的な形とするために、夏休みの課題として自由研究・自主制作も伝統的に行われています。昨年、私学理科研究発表会で、高校生も含めた中で京都新聞社賞・最優秀賞をいただいた「御苑の巨樹とそれを取り巻く環境」も、1人の生徒の3年間にわ



長安 晃

【ながやす あきら】

女子中学校・高校教諭
（入試対策部 主任）

たる取り組みの大きな成果でした。「教科展」で発表されたり、「きささげ（自由研究）などの優秀作品集」にまとめられたりする生徒たちの研究の中には、ときには専門家が驚くような高度なものもあります。

高田●学習面以外に、学校行事などでも、生徒の能力や個性を伸ばすためにどんな取り組みをしておられますか。

竹山●学園祭をはじめとする学校行事も重要な学びの一つと考えています。2、3年は、京都会馆第1ホールを舞台とし

て、クラスごとに劇を発表します。脚本、大道具、衣装、配役それぞれを分担して一つのものを創り上げていく過程はなかなか難しいものですが、その中で生徒たちは、大学生や社会人になってから必要とされる企画力やコミュニケーション力なども学んでいくわけです。一つの作品を創り上げていく過程での苦労とそれを乗り越えるドラマ、最後に到達した達成感、将来、研究や事業を展開していく上でも非常に役立っていると卒業生たちは振り返ります。クラブ活動も、運動ク

多様化・柔軟化するコース制度

高田●女子中学校・高等学校の、現在のカリキュラムの特長は何ですか。

長安●本校では03年度にコース制を導入しました。リベラル・アーツ（LA）コースとワイルド・ローヴァー（WR）コースの二つのコースがあり、LAは約200人、WRが約40人、総計1学年240人です。LAは推薦入学制度を使って内部進学（学校法人同志社内の大学、女子大学への進学）するコース。WRは医・歯・薬・理工分野で外部受験（学校法人同志社以外の大学等を受験）するコースです。以前は女子中・高では医・歯・

薬・理工に進む生徒は少なかったのですが、時代の変化かもしれませんが女子中・高でもこれらの分野を外部受験する人が増えてきました。それまでは自分たちで勝手に勉強しなさいという、ちょっと突き放した感じでしたけれども、いろんな進路の方に十分に対応したいということで二つのコースを設置したわけです。

ただ、二つのコースの違いは志望の違いであり、両コースはまったく対等の関係です。ときどきWRの下にLAがあるのかなどと言われますが、そういうことはまったくございません。ただ、コース制開始から5年が経過して、事情は随分変わってきました。女子大学に薬学部ができましたし、大学でも工学部が理工学部で発展し、生命医科学部もできています。そういった意味では、WRコースは外部受験だけでなく、内部推薦で大学、女子大の理系の学部・学科を志望する生徒にとっても適しているのではないかと考えています。

高田●二つのコースで、授業形態はかなり異なりますか。

長安●中学校の3年間は混成クラスです。1クラス約40人の中にLAコースが34、35人。WRが5、6人います。月曜から金曜までは、どちらもしっかり同じ授業を受けていただきます。中学時代は基礎をしっかりと勉強してほしいため、コースに分けて授業を行う必要が全然ないわけですね。もう一つは、中1の段階でクラスを分けてしまうと、WRは人数の関係上6年間同じメンバーになります。せっかくこの学校に入ったのですから、2年生、3年生とクラス替えを行う中で多様な人間関係を築いていただきたい。一つだけ違うのは、WRだけは高校になって外部受験される方がたくさんおられるので、土曜に特別授業を行っている点ですね。

高田●途中でコース変更はできますか。

長安●LAで入学すると原則としてLAで、WRで入学するとWRで卒業しますが、小学校6年生の段階で将来のことはつきり分からないというのが実際のところでしょうから、希望を出せばWRからLAに移ることができます。LAからWRに移る場合は、本人の希望に加え、

特に英語、数学、理科を中心とした成績審査があります。コース変更ができるのは6年間で2回のみ。中学2年から3年に上がる時と、中学3年から高校1年に上がる時です。高校に入ってから二つのコースはカリキュラムがまったく異なりますので、コース変更はできません。

高田●続きまして、香里中学校・高等学校の松延先生、お願いします。

松延●本校では、教育内容の効率的配置を考えてカリキュラムを作成しています。それから大半の生徒が同志社大学、女子大学への進学を考えていますので、6年間でなく10年間を視野に入れて基礎学力を十分に身につけさせた上で、将来の進路選択の可能性を十分に確保して広げていくようなカリキュラムを考えています。そういう意味で、高校までは全員が全科目必修です。高校3年には、大学進学を視野に入れ、人文・社会・国際という文系の選択科目と理系の選択科目の、計四つの選択科目を設置しています。その中で、さらに進学先の大学での学習に結びつける学びをしています。

その際、将来を決定するために、キャ

リア教育を中学生から始めています。本校で「リベルタス」と呼んでいる総合的な学習の時間なのですが、各学年でいろんなテーマを持って行っています。中学生では、卒業生をはじめ各界で活躍しておられる方からいろんな仕事の内容を紹介していただき、生徒たちが将来を決定する際の一助にしたいと考えています。これは他の学校でも同じだと思いますが、本校ではいわゆる受験勉強にこだわることがありませんので、生徒の探究心や興味を引き出す工夫をシラバスに組み

込んでいます。理科の実験もかなり時間を多くとっていますし、社会も中1の時に「ブレゼン大会」というのを最後に開催するのですが、自分たちで会社を作ってコマースシャルを作り、PRして発表する。パワーポイントの使い方も教えます。最終的には広告代理店に参加していただき、コンテスト形式でやっています。プロの方からも評価をいただいております。「これは実際に商品として使えますね」というコメントをいただいた生徒もいます。あるいは、国語の授業以外に「表現」



松延 貴司
【まつのぶ たかし】

香里中学校・高校教諭
(入試委員長)

という授業があります。一つのクラスに2人の教師が入り、ティームティーチングで行うもので、表現力を伸ばし、いろんな語感を豊かにするのがねらいです。英語は各学年にネイティブスピーカーを入れ、特に中1の場合はハーフサイズのクラスで、ティームティーチングという形できめ細かい指導をするようにしています。その結果09年度、中学校は英検の優秀団体賞の表彰を受けました。また、さまざまな学力アップをめざしたり授業以外の分野に関心を持つたりする生徒のために、土曜講座を設置しています。例えば「化石を探してみよう」とかですね。これは中・高校の授業ですが、簿記講座もしています。中学生からでも参加でき、昨年は中学生で簿記検定3級、高校生で2級の合格者を出しました。中には将来、公認会計士をめざしたいという生徒もいます。

高田●このたび文部科学省から指導要領の改定が告知されていますが、これに伴う改革は何か計画しておられますか。

松延●指導要領の改定に先行して、来年度からカリキュラムの変更と、週6日制

を導入することになりました。やはり基礎学力を確実に身につけてもらう時間を確保する必要がありますから。従来は6時間5日制で30時間だったのが、土曜が3時間、平日の1日を5時間にして32時間に。本当の意味で時間的な、あるいは精神的なゆとりの中で勉強させて、クラブ活動などともちゃんと両立できるようにした上で基礎学力の充実を図っていきたいと考えています。

多様な帰国生の可能性に応える

高田●ありがとうございます。国際中学校・高等学校の現状を坂下先生からお願います。

坂下●本校では、教育そのものが特色です。世界の30〜40カ国くらいから帰国生が来ており、帰国生の数が中学・高校ともに日本で最も多い学校なんです。中学校は約300人のうち200人が帰国生、高校では在校生800数十人のうち500数十人が帰国生です。帰国生がたくさんいるということだけではなく、彼らが刺激し合うこの空間が、彼らの可能

性を限りなく広げる。生活をしていくこと自体が刺激です。この中で、一様ではない自分の強みを考えながら、限りなく可能性を広げていく姿勢が学園の中に満ちあふれています。自分とは違う価値観があることによって、ものの本質というものを見極めていく。そういう姿勢を教員も生徒も持っていることが非常に大きな特長ですね。一般生徒（帰国生以外の生徒）も、そういう帰国生がいる学校であることを認識し、楽しみにしてやってきています。我々もあらゆる可能なことを準備して、生徒が自身の可能性を追求してほしいと願っています。"Your future, your choice"、未来はあなたが選んでいくんだ。それだけのフィールド、それだけのものを我々は用意していますよ、という姿勢ができていくかと思っています。

ただ、日本に住んでいてもそうであるように、帰国生そのものの経験、経歴はバラバラです。そのために、それぞれ違った経歴を認め合いながら切磋琢磨していく姿勢が学園にあると言えます。それから、海外に暮らしていたということは、

日本の事情から離れていた生徒が多い。海外では子どもたちだけで行動することがあまり一般的でないことから、家族関係が非常に良いという雰囲気を感じられます。素直な生徒が多く、我々も毎日楽しく学園生活が送れています。

高田●多くの帰国生がいるため、英語教育に大きな特長があると聞きます。

坂下●中学1年生でまったく英語を知らない生徒も入ってきますし、逆に、英語がかなりできる一般生徒もいます。帰国生でも日本語がやや不得手、または両方できるなど、さまざまですので、英語の授業は中学1年生からSa、Sb、Gという3段階で行います。Gは主に、一般生徒や日本人学校出身生徒向けの授業、Sa、Sbは主に海外の現地校やインター校出身の生徒向けで、基本的に日本語は使わず、日本にいながらにして英語圏の現地校の授業内容が体験できる形です。英語をツールとして何かに取り組み、情報を集め、発表する。一般生徒も頑張れば、何年か後には入れる状況です。こういったことに本校では、あらゆる生徒が挑戦できる可能性があります。一般生

徒もローム館（大学京田辺キャンパスにある最先端情報環境施設）を使い、例えばニュースキャスターに扮して映像を撮るようなこともあります。奈良公園に行つて、一般生徒が外国人観光客にインタビュをするという取り組みもしています。

高田●英語以外の科目はいかがですか。

坂下●日本の教科内容をしっかりやろうということ、帰国生もそれを期待していますし、意欲を持っています。ただし、日本語のレベルが少し足りない場合には

それを補強するクラスもあります。一方で、帰国生・一般生という区分以外に、文系・理系に分かれていくこともある程度必要になってきますので、特に中学生の場合は基礎をしっかりとやろうという姿勢ですね。高校から初めて日本に帰ってくる生徒もいますので、高校1年では全般的なことをしっかりと学ぶ。2年、3年になるにしたがつて分化をしていく、専門化をしていくこと。これはコース分けてではなく、一部の修得科目が文系・理系の科目に分かれるだけで、ホームルー



坂下 淳一
【さかした じゅんいち】
国際中学校・高校教諭
(入学センター主任)

ムのクラスはまったく同じです。一般生徒、帰国生徒、内部生徒（学校法人同志社の学校からの進学者）、外部生徒（受験による入学者）との混合クラスの中で、クラス授業が約1/3になり、あとは授業が分化していく態勢を取っています。こういうカリキュラムを組むのは学校としては非常に難しいのですが、生徒にとつては、まんべんのないクラスの中でいろんな意見を聞かせながら、授業はどんなに分かれていくという、理想的な形を追求していきたいと考えています。中学校は1クラス30人前後からスタートして、帰国生が少しずつ帰ってくる。高校ではもう少し多くて40人を超えますが、授業をする中で細かく分かれていく形です。

高田●第二外国語はどうなっていますか。

坂下●中学校からは経験者、高校からは初心者と経験者という2段階のクラスで設置しています。ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語、スペイン語と、非常に細かい区分です。まさに"Your future, your choice"、あなたが選んでく



高田 芳樹
【たかだ よしき】

大学企画部企画室長
法人部一貫教育調整課長
大学一貫教育推進課長

ださいという設置の仕方であり、これが本校の教育姿勢の基本です。

小・中・高・大連携で 築き上げていく 岩倉キャンパスの未来

高田●ありがとうございます。次に新しい教育の取り組み、その効果、今後の展望を語っていただきたいと思います。10年秋に今出川から岩倉（京都市左京区）へ移転する中学校から伺いましょう。

竹山●今出川キャンパスは歴史と伝統、

ていくつもりです。

高田●岩倉では、まさに小・中・高校という一貫教育体制が整いますね。

竹山●一貫教育ということについては、大学にもお願いがあります。10年度から、法人内の4中学が同志社小学校からの生徒を受け入れることになります。幼稚園から入った生徒も同志社小学校に入学しており、総長や大学長からも、これらの生徒が同志社の核となって育ってほしいという願いが述べられています。しかし関東における、小学校から設置されている私学の実情から考えても、非常に個性豊かな生徒が小学校から進学してくる状況があります。今後は大学も学力というもの、従来のような狭い捉え方ではなく、幅広く捉えていただかないと、これらの個性豊かな生徒たちが大学まで進学していくことがなかなか難しくなるのではないかと危惧しています。

高田●特にどのような点が問題になっているのでしょうか。

竹山●現在のシステムだと、どうしても大学の学部・学科が高校に求める枠組があつて、それを高校、中学校、小学校と、

豊かな緑が調和した素晴らしい環境でしたので、岩倉キャンパスにおいてもレンガ建築で中学校、高等学校の校舎建設を進めています。中学棟やキャンパスの精神的シンボルとなる新チャペルなどを含む部分の建築も現在進んでいます。キャンパスに隣接する地下鉄「国際会館」駅の出口に直結する形で、新たな校門も造りました。今出川キャンパスの通学に利用していた同じ電車で岩倉にも通えるよう、始業時間を遅らせる予定です。通いやすさはほぼ同じです。併せて、兵

求めていくことになります。同志社中学校としては、小学校とも既に教科の交流など学習面でなく、カウンセリングや特別支援教育を含めた生活指導面も含め、さまざまな交流を積極的に進めてきています。小学校教育が十分に尊重される形でいろいろな心配りを行いながら、実際に交流を行っています。大学でも、学部・学科が中心となる判断を超えたところで、大学としての経営上の視点も含めた政策、幅を持った考え方を確立していけないと、この問題は解決していかないと思います。「小学校からの出身生徒のことは、小学校と中学校、高等学校で考えてほしい」というだけでは、同志社幼稚園や同志社小学校に入った生徒や保護者の期待を最後に裏切ることになりかねないということを、大学として真剣に考えていただければと思うのですが。その意味でも、大学の附属の小学校であるという性格を生かしていつてほしいと思います。

高田●中学校と統合して6年間やっていける高校では、そのあたりのご計画、心構えなどはいかがですか。

庫・大阪での中学入試制度変更の状況も踏まえ、10年度入試から3・4教科選択制も導入して受験生の門戸を広げていきたいと考えています。

中学校校舎の一新に合わせて、「教科センター方式」と呼ばれる最先端の教室運営方式も採り入れる予定です。英語、数学、国語、社会などすべての教科を従来のホームルーム（HR）教室を組み換えた「教科専用教室」での授業を行います。それぞれの教科学習にふさわしい教具、教材、掲示物を整備したメディアスペースも隣接して設け、従来からある教科教員室とも結合させることで、より専門性の高い教育の提供、教員への相談がしやすいするなど、生徒へのよりきめ細やかなサポートを実現し、学習環境を飛躍的に高めます。

中学校と高等学校はそれぞれの発達段階に応じた独自の歩みと教育活動をしてきましたので、当面はそれぞれがこれまでの教育環境と水準を維持することに全力を尽くし、十分に時間をかけながら、小学校との関係性も含めて、どのような一貫教育体制にしていけばよいかを考え

山崎●竹山先生が言われたように、私たちも中学校と一緒に、あるいは小学校を含めてやっていく中で一番良い方向を考えていく、つまりトップダウンではなくボトムアップの一貫教育を築き上げていくことが非常に大事ではないかと考えています。一つのスローガンのもとに何かをするのは同志社にはなじまないであろうと思います。ですから、具体的に今までやってきたことを、どう強化していくのか。それから、同志社だからできることは何かを考える。高大连携が最近非常に強化されてきていますね。商業簿記講座などのように具体的に簿記の授業を受けるだけでなく、さまざまな講演、説明会などもあるかに充実してきました。単に同志社大学へ推薦で行くだけでなく、生徒が実際にこの学部・学科で学びたいということを分かった上で進路を決断するということができると思っています。

それに伴い、生徒も自分で考えながら授業内容に取り組んでいます。

もう一つは、キャリア教育という面でも一貫教育のメリットを生かしたいですね。特に同志社大学を出て社会のいろん

な現場で活躍している方がたくさんおられることもそれぞれの学校の強みだと思いますし、本校でも「ようこそ先輩」という企画を立て、毎年先輩を呼んでいろんな話を聴く機会を設けています。これは、生徒が自分の進路を考える上で非常に大きな刺激になっています。また、「パワーアップセミナー」という企画があり、裁判の傍聴、工場見学、たとえば司法試験や会計士試験に合格した卒業生から、どんな気持ちで資格を取ったのか、どんなふうに着格取得に挑戦していったのかを話してもらうなど、多種多様の機会が増えていきます。いずれも高校3年の2月に大学の準備期間というで行っていたものが、今は高校1、2年生と一緒に受けるという形で、より内容が充実してきた点も大きいと思います。そういう意味で、高校と大学との関係は実績を積んできています。

中学と高校の連携については、これまでいろんな模索はしてきたのですが、実際に岩倉キャンパスという同じ場所を取り組めることを考えたいですね。やはり礼拝を通して、良心を手腕に運用する、

あるいは他者と共に生きるというテーマを考える。中学から高校にかけて生き方を探るという点で生徒を発展させる6年であるためには、キリスト教主義学校として、どういった6年をめざすのか。こういうことも、一緒になって大きく発展できる点ではないかと思えます。新しい環境で岩倉キャンパスを共に築いていく中で、さらに何ができるのかを共に考えたいと思っています。

女子校の果たす役割と 共学化に見る女子生徒の存在

高田●ありがとうございます。では、女子中・高校の長安先生。

長安●我々は2本の柱を考えています。一つは、聖書（マタイによる福音書5章13―16節）に言う「地の塩、世の光」となる女性の育成。人間性が豊かで、人の痛みを十分に理解でき、能力に応じて社会に貢献できる女性の育成をめざしています。新しいことにチャレンジしていくのはもちろん大切ですが、「地の塩、世の光」となる女性の育成を今後もことあることに再確認し、徹底を図っていき

い。そういう意味では、これが同志社女子の伝統であろうと思っていますし、時代が変わっても、その精神を十分に守っていきたいと思っています。

もう一つの柱は、これはありきたりのことかもしれませんが十分な学力をつけることです。先ほど中学のカリキュラムをお話しましたが、高校になりますとWRコースでは1年生から3年生までまったく同じメンバで上がっていきます。カリキュラムもL Aとは、まったく別個です。必修科目を学んだ後は、WRでは英語、数学、理科が中心で、ほとんど選択の余地はありません。ただ、高校3年生になると国語、英語、数学、化学、物理、生物でクラス分割を行っています。このクラス分けは科目によって違いますが、外部受験をする者と同志社大学、女子大学への推薦という生徒もいますし、センター試験を受験する生徒もあり、これらの目的によって分けている科目もあります。

香里中・高ともよく似ていますが、高校1、2年生では芸術科目以外はすべて必修になっていて、中学校時代に基

礎をしっかりと勉強して、高校1、2年生ではその上にさらに肉づけをするという意味で、ほとんどの科目を履修します。

L Aでは高校3年生になると、30時間のうちの16時間が選択になります。よく間違われるんですが、WRは理系だからL Aは文系と捉えられますが、L Aは文系にもなるし理系にもなる。自分の志望に合わせて独自のカリキュラムをつくるということですね。

高田●香里中学校・高校ではどのような改革が行われていますか。

松延●過去10年間で香里は大きく変わりました。従来男子校でしたが、2000年度から高校の国際コース開設にあたり、一部共学化を始めました。その後02年度に中学校で共学化を始め、05年度より現在のカリキュラムに移行しました。07年度には全学年が共学になりました。

高田●女子生徒が入学することで何か変化はありましたか。

松延●随分変わりましたね。従来のパンカ라의雰囲気、少し華やかなものに変わってきました。服装だけ見ても、な

フルになった。半分が女子生徒ですから、入学してくる生徒の学力も向上していますし、男女が刺激し合って相乗効果も見られます。クラブ活動も活発で、最近、少し元気のなかった音楽系のクラブが、女子生徒が入ってきたことで活性化し、それまではあり得なかったのですがダンス部などもできました。こちらは近畿大会でグランプリを取るまでになり、現在頑張っています。同志社女子大学への推薦入学も実現しましたので、進路選択の幅も広がってきています。

この共学化に踏み切ったのが、本校のちょうど創立50周年を機に行った学校改革だったのですが、その時入学試験に関しても大きな改革を行いました。高校入試に関してですが、従来の学力試験をやめて、いわゆるA O入試を導入したので、これはそれぞれの中学校でしっかり日ごろの勉強をやり、クラブ活動、生徒会・学級会活動を懸命にやっていた生徒さんにぜひ来ていただきたいという主旨でした。この入試制度によって、バランスのとれた、才能豊かな生徒さんが多数入学するようになりましたので、本校の中学から進学する生徒にとっても大きな刺激になっていると思います。

この時の学校改革で、同時に重点的に取り組んだものとしては、宗教教育と国際教育が挙げられます。前者は同志社としては当たり前のことなのですが、残念ながら、それまでは毎日礼拝をしているとか、クリスマス行事をするとかに限られていることが多かった。もともとキリスト教を生徒にとって身近なものにしようということで、特に聖書科では教会レポートとして、生徒たちが必ず年に数回教会を訪れるという授業も取り入れられました。宗教委員会もきっちり組織化して、生徒たちが常に礼拝の中心的な役割を持つような形にもなりました。

高田●宗教委員会というのは、教員による組織ですか。

松延●生徒による組織です。それから、クリスマスのある方も変わりました。従来は本校生徒だけでやっていましたが、地域の方をお招きして共にクリスマスを祝う集会を始めました。また、さまざまな形でボランティア活動にも力を入れています。

国際教育・国際交流

高田●国際教育への取り組みはどうなっていますか。

松延●国際委員会を設置し、いろいろなプログラムを始めています。一番大きなものは高校2年生が全員参加する海外修学旅行です。今年度からはオーストラリアに目的地を変更しますが、当初はハワイに行っていました。現地の学生と交流したり、いろんな行事をする中で特筆すべきは、現地にある同志社ゆかりのマキキ聖城教会との交流です。現地で礼拝を持ったり、教会の方と交流したりという取り組みを行いました。

それ以外では、語学研修あるいは交流校プログラムを、カナダ、アメリカ、オーストラリアで行っています。短期間ですがアメリカ、イギリスの交流校からホームステイを受け入れるプログラムもありますし、従来からあった年間留学生の派遣に加え、年間留学生の受け入れも毎年2人行うようになりました。さらにクラブも海外遠征を行うところが出てきまして、サッカー部やラグビー部がイギリ

ス、ニュージーランドへ行っています。

これらのプログラムの中で、アメリカに関しては「新島襄の足跡をたどる」という副題をつけて、ボストンの新島ゆかりの地、あるいはアーモスト大学、フィリップスアカデミーなどを訪問し、新島や同志社のことを考える機会としています。最近では国際委員会が中心になり、「The Small Place」という催し物も行っています。今までは特定の生徒だけにそういう機会があったのを全校生徒に対象を広げ、在日外国人をお招きして、それぞれの国の文化を紹介していただき、こちらからも日本の文化をお伝えするという試みです。そういう意味ではこの10年間でいろんな試みをしているのですが、それぞれに十分な成果を発揮していると感じています。

坂下●国際中・高校の海外研修については、1カ所に全員で行くということとは、あらゆる英語のレベルの生徒がいるために、なかなか難しいものがあります。これはやはり個別の対応が必要です。そこで、一般生徒でも行ける体験学習的なレベルから大学の単位が取れるようなコー

スまで、基本的には短期ですが、現在ではアメリカ、中国、フランスに対して、定期的なものとしては合計10を超えるプログラムがあります。いずれも有名な学校ばかりで、一般に個人ではなかなか行けない学校です。特に新島襄が学んだフィリップスアカデミーのサマーセッションやアーモスト大学での語学研修などは、同志社ならではの特長でしょう。レベルの高いところではハーバード大学のコースなどもあります。帰国生でも厳しいものを用意して、あらゆるレベルに対応できるようにしています。

こういった結果、「同志社に來たい生徒」に來てほしいということもあり、08年度生から高等学校の一般生徒の推薦入試を始めました。今まで千葉県、神奈川県、新潟県、福井県、島根県、沖縄県からは2人入学しました。沖縄県からの1人は宮古島出身で、その生徒は、海外で活躍するような仕事に就きたいが、それにはどういふ学校に行けばいいのかをインターネットで探した結果、帰国生も大勢いる同志社国際がいいということで行ってきました。宮古島にいた時は何をし

たらいいのかわからなかったが、本校にやってくる初めて、世界は狭いことに気付いたと言っていました。現在、フィリップスアカデミーのサマーセッションで頑張っています。

教員が新しい発想で創った 国際中・高校の複合メディア施設

高田●最近では、図書館にさまざまな機能を持たせて授業に利用する試みも行われていますね。

坂下●レクチャー形式の授業はもちろん知識を修得するという意味でもとても大切なわけですが、それとは違うラーニング・メソッドもかなり導入しています。本校では以前から、英語を中心としてコンピュータを使いながら授業を行ってきましたが、これを発展させる目的で、新しく「コミュニケーションセンター」という複合メディアセンターを造りました。深い知識を習得するのは当たり前ですが、それをまとめ上げて自分の意見として発表する力を育てようということです。情報収集力、考察力、問題解決力、プレゼンテーション力ということで、社

会を生きていく力、社会を見て、変えていく力を習得させようと考えています。

高田●コミュニケーションセンターとは、具体的にどのような施設ですか。

坂下●一度に7カ所以上で200人から250人が別々に授業を行うことができます。図書、コンピュータ、AV機器などを、その特長を生かしながら十分に使える施設です。コンピュータは200台弱ありますが、数の多い少ないではなく、それらを駆使した学習の形態が非常に特徴的であるということです。これにより、授業中は静まり返るといふ雰囲気から、いきいきとした図書館ができた。平均しますと、1日に数十クラスがそこで授業をしています。もちろん中学校から高校3年までの中で、高学年になるにしたがつて使用率は上がります。基礎的な勉強を行ってから、応用力をつけていくということです。

実は当初、このような発想で新たな施設を造ろうとしたところ、設計事務所が対応できなかったんですね。何を造っているのかわからないところからスタートした。では教員自らが造ろうということ

になったのですが、既にある日本の図書館に、我々の考えているものはなかった。そこで、授業をする上でどんな形が使いやすいのか、デザイン面、家具の選定など、すべて教員が考えて造ったんです。

毎日の礼拝や宗教行事を通じて 醸成されるキリスト教精神

高田●各校の特色ある教育を語っていただきました。一部ではキリスト教教育への取り組みもありました。女子中・高校の「地の塩、世の光」となる女性を育てるという理念ですが、具体的にはどのような教育なり活動をしておられますか。

長安●本校では、月曜から金曜まで20分の礼拝があります。毎日の礼拝を6年間続ける。ですから、間接的だとは思いますが、6年間の礼拝を通じて、その生徒さんの人生観、価値観の形成に貢献していると思います。それから、本校の宗教行事で最大のものがクリスマス・ページェント、イエス・キリストの誕生を祝う行事です。これを初めて体験すると、きつと感動すると思いますよ。イエス・キリストの誕生を、舞台と客席が一体とな



つて進めていく。もちろん聖書朗読や讃美歌と共に進行していくのですが、舞台と客席が一体となつて讃美歌をうたう場面もある。午前の部は在校生だけです。夜の部になると卒業生もたくさんやってきます。

「地の塩、世の光」を具体的にどう教えているかはなかなか難しいとは思いますが、毎日の礼拝、多くの宗教行事や特別行事を通じてじっくりと身につけていってほしい

という意味で、6年間というスパンで見えていく形になると思います。

高田●高等学校の山崎先生、そのあたりはいかがですか。日常の活動を通じてキリスト教主義で育むものとは何でしょうか。

山崎●本校でも岩倉キャンパスクリスマスがあり、特に小学校と一緒にキャンパスクリスマスをつくるという企画が12月にあります。参加した生徒には非常に魅力的だとは思いますが、それだけではなくて、毎日の礼拝を積み重ね、週に一度のキリスト教の授業を受けることが3年なり6年なり続く中で、将来どんな進路でどんな生き方で、どんな社会人として活躍していくかということのバックボーンになっていくのではないのでしょうか。例えば同志社大学の中で、学内出身者が、外から来た学生とは違うバックボーンを形成しているという面で評価されている部分はあると思うんです。その中の一つに、礼拝とキリスト教の授業を継続してきたこともあるのではないかと思います。

坂下●私たちもよく言いますが、知識をしっかりと持つのはどの学校も日本全国

当たり前ですが、それをどう運用していくかによって、世の中を狂わせてしまったり、あるいは正しく導いたりということがある。それをできる機会が一番多いのが、やはり毎日の礼拝です。本校でももちろん、中・高校別で毎日全員が集まって礼拝をします。基本的には生徒が司会をして、全教員が持ち回りでお話を担当する。もちろん授業でもそういう話しますが、それだけでは不十分。そういう意味で、礼拝は重要だと思っています。社会の仕組みや見方、いま起こっていることをどう理解すればいいのだろうか。そのような疑問を投げかけることは彼らには非常に刺激になっています。それによって知識を正しく運用するということを身につけて、世の中で自分はどう生きていくのだという姿勢が何年もかけて徐々に養われ、育まれていくのではないのでしょうか。

さらに「行動」する キリスト教主義教育でありたい

竹山●中学校でも一日の初めにある「礼拝」を大切に、校長も一人ひとりの生

徒に毛筆による自筆の誕生日カードを贈っています。さらに、一人ひとりを大切にする教育を実践する中で、生徒指導やカウンセリングにおけるキリスト教主義教育の役割というものがあるのではと思います。キリスト教や聖書の考え方の中に、何か問題を起こした時にイエス・キリストの前に出てきて悔い改めて赦しを得るというものがありますが、中学生の段階であれば義務教育ということもありますから、問題を起こした生徒に対しても粘り強く指導していきます。課題を持った生徒の背景には複雑なものもありますから、保護者や生徒を交え、カウンセリングなどを取り入れながら、場合によっては専門医とも連携して継続的な指導を行っています。キリスト教学校教育同盟の中で、関西地区にはカウンセリング研究会がありますので、新任の先生や生活指導部などの担当の先生を中心に参加し、学ぶことも最近進めているところです。

従来こういうカウンセリングは保健部や生活指導部など、どちらかが中心となつてやってきましたが、各学校の聖教科

の先生が、牧師の資格を持つておられるので、キリスト教主義の学校によつては宗教部や聖書科の先生も関わりながらカウンセリングをしているところもあるようです。そのような方法もキリスト教主義教育の広がりの中で課題として考えていく必要があるのではないかと思います。

高田●松延先生のところでは、キリスト教主義教育の制度的な整備が進んでいるように見受けられます。

松延●結局、礼拝や聖書の授業は同志社では当然皆さんやっておられるわけですが、少し乱暴な言い方になるかもしれませんが、どちらかというと、生徒にとってやや受身的なアプローチになっている部分があるのではないのでしょうか。先ほど少し述べましたが、本校ではボランティア活動を推進しています。きっかけは94年。大学神学部出身の金井愛明牧師に本校で行っていただいた礼拝でした。金井牧師は大阪市西成区の、あいりん地区にある西成教会の牧師さんで、ずつといわゆる日雇い労働者の方と共に暮らしてこられ、常に支援をしてこられた方です。その金井牧師が本校で奨励をされた時

に、とにかくお米が足りないことを生徒たちに切実に訴えられました。それで、当時の教頭を中心に献米運動を始めたんですね。ひと握りの米をみんな持ち寄ろうと。それを西成教会に持つていくだけではなく、自分たちでおにぎりにして労働者の方の一つずつ手渡しをする。これはキリスト教の枠の中で教えているわけではないんですけれども、生徒たちはそれを体験する中で、社会の実状と共生の意味を実感していると思います。

この活動はずっと続いていまして、教員だけでなくPTAの方も参加してくださっていますし、毎年文化祭で行う献米運動では約1トンのお米が集まります。さらにそれを学内だけにとどめず、地域の方にもクリスマス集会で呼びかけて、そこでもたくさんのお米をいただいています。それがきっかけになりました、ボランティア部ができました。その生徒は献米運動以外のいろんな形の施設訪問などにも、積極的に取り組んでいます。結局それは、キリスト教教育をどう実践していくかという意味で、形として現れているのではと思うんですね。以前、ト

ルコや台湾の大地震の際には献金を現地へ届け、そこで役立てていただく、あるいはボランティア活動をしてくるということもしてきました。やはり、受け身だけでなく、こちらがいかにアクションを起こして形に現していくかが課題ではないかと思っています。

中・高校との連携に 大学も積極的な参加と発信を

高田●各学校でいろんな取り組みをしてこられたことがよく分かりました。ただ、今までは協同して取り組んでこられたことはあまりないように思いますが、実情はどうなのでしょう。

山崎●別の観点から見れば、同志社ではいろんな学校が積極的にいろんな活動に取り組んでいるから、それを学び、自分たちでさらに発展させてみようというところが特長的ではないかなと思います。私たちが04年に知創館というメディアセンターを造りましたが、いろんな学校から見学に来られるとびっくりするんですね。図書館なのに、本を貸し出すというよりも、コンピュータを自由に使いなが

ら授業を作っていく点などを、どの見学者も評価してくださいます。これは国際中学校・高校に勉強させてもらったという思いが私たちにはあるんです。国際中・高の発想は、非常に新しかった。それを私たちは何度も見学させてもらい、これを同志社高校に合う形で造るにはどうすればいいのかを、単に設計事務所に任せるのではなく、自分たちでもコンセプトから随分時間をかけて造りました。昨年はさらに模様替えをして、もう少し本校に合うようにしました。

先ほども坂下先生のお話にあつたように、情報収集をして判断して問題解決をして発表するということは、外部から来る人は大学で初めて経験する人も多いのでしょうけれど、基礎的な学力を積んだ上でいま高校で求められているのは、それを使いこなす能力です。それは大学、社会人になって伸びていくものになる。そのために私たちも改良しながら施設を造っていつています。いろんな学校が新しい校舎を建てたばかりですが、それらに学ばせていただき、本校でも改良の参考にする。そういうことが同志社の中で

できる点が、われわれの持っている強みではないかと思っています。

長安●自分から動いて情報収集をして、それをまとめ上げて自分自身の意見として発表する、ディスカッションする。やはり四つの中・高校から進学する人たちというのは、一般の高校から来る人に比べると、一概には言えませんが、自分から動いて判断し、自分の意見を発言するということについては長けているのではないかという気がします。

竹山●新しい中学・高校ということで考えているのは、6年間一貫でやってきた学校と違って、同志社中学校では中学3年生が主人公になれるんですね。中学・高校でそれぞれ発達段階の違いを非常に大切にしてきた結果、中学3年という時期に学習上、生活上の節目がある。中学・高校というのは、ともすると高校中心の運営になりますが、中学校独自のプログラムとして、本校はどの学校にも負けないものを培ってきたと思います。同志社高校でも同志社大学への推薦進学だけでなく、同志社大学にない学部や学科を求めて他大学を受験する生徒も例年一

れますか。

定数います。それに対応する特別補講や講座、高校3年の選択授業などハイレベルな授業ができるスタッフも揃えている。それぞれの強みをさらにどう発展させ、生かしていくか。

それから他の三つの法人内中学・高校と違うのは、やはり同じキャンパス内に小学校がある点でしょう。小・中・高校が同一キャンパスに揃う。これも大きな特徴で、そのことが教育に与える影響は非常に大きなものがあると思います。山崎先生もボトムアップ式と言われましたが、そのとおりで、小学校から高校までがそれぞれの特徴を生かしながら、どんな小・中・高一貫の教育体制を確立していくか。これは他の3校とかなり違った形を模索していくのが現実的ではないかと思っています。

それから少し話が戻りますが、先ほどから出ている高大連携については、大学全入時代を迎える中で、各学部・学科でも、高校生だけでなく中学生も対象として学部・学科の魅力や研究内容を伝えていってほしいと思います。

高田●具体的にはどんな伝え方が考えら

れますか。

竹山●「いい生徒を送ってください」という受け身の姿勢だけではなく、学内校の優秀な生徒に選んでもらうように競争して宣伝していただけたらどうかと思っています。実は4年ぐらい前から京都大学が「京大ジュニアキャンパス」という取り組みを始め、京都の中学生を対象に、さまざまな学部・学科のプログラムを準備して、オープンキャンパス並みに研究室、授業体験を実施しています。高校生の段階では、現実的な入試や難易度などに関わった学部選択をしていく可能性もありますが、もつと純粹で、これから知的好奇心や探究心を育んでいこうとする中学生の時期に、大学もこんな興味深いことをしているということを知らせてほしい。同志社中学では既にお願ひしてロースクールや理工学部、生命医科学部の訪問をしています。大学の学部・学科が企画を立てられ、京都大学のような取り組みを学内中学校を対象にしていただけないかと。そうすると、もつと大学での学びが生徒たちにとって近くなり、学んでいく意欲にもなる。大学にとつても

メリットになるのではないでしょう。

低年齢化に対応する 諸学校の連携

高田●ここ10年近くで、生徒や保護者の状況が大きく変わったと言われています。この変化を各学校はどのように受けとめていますか。

竹山●そういう生徒や保護者の変化に私たちも日々苦慮しています。中学校は義務教育ということもあって、学習面でも生活指導面でもかなり丁寧に指導しており、補習や再テストもやっています。特に中学1年生の担当者に対しては、ここ1、2年、昼休みや授業の休み時間でもできるだけ教室に残り、生徒と話をしながらクラスの生徒状況を把握してもらうように伝えています。あるいは学級活動の時間も一緒に遊んでもらう時間も必要です。そういう意味で、小学校の先生がしておられるような対応も実際に求められています。

大学でも近年1・2年次生対象の「導入教育」に力を入れてしていると聞いています。大学の先生は、高校の先生から、高

は「ひらめき・ときめき・サイエンス」という企画になりました。今年は、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトに応募しました。一つは京都大学の原子核素粒子と、もう一つは生命医科学部と理工学部電気工学科で二つとも通りました。内容は、言ってみれば今まで大学と協力しながらやってきたものを、もう少しきちんと行う形です。そういう「おまかせ」にならない高大連携を、同志社という同じ学校法人ならではの強みを生かして、今後はさらに進めていけるのではと思っています。

竹山●一番最初に本校の特長として、「本物」を生徒たちに伝えるというお話をしました。研究室に行ってお話を聴く、裁判所に行つて実際の裁判を見る。全部は分からなくても、「あつ、こういう研究をしているんだ」ということを知り、発見していくことについて、私は中学生は侮れないと思います。カエルの研究を3年間続けた生徒は、京都大学の動物学研究室に呼ばれ発表しました。そういう環境なり雰囲気なりを伝えていく、そしてそれが知的探求心を高めていくと思

校は中学の先生から、中学は小学校の先生から、それぞれ授業方法や生徒指導の対応を学ぶ必要があるのではないか。これからの時代は、そういう「謙虚な学び」に合わせて、どの発達段階においても、「生徒とどれだけ一緒にいて指導していくか」が問われると思います。同志社には時間をかけて関われば必ず結果が返ってくる生徒たちが来ていると思うので、せっかく小学校から大学まである環境を生かし、今言ったようなことができないかと思っています。聖書には100匹（99匹と1匹）の羊のたとえ話がありますし、新島先生の日記にも「最良の授業法」というのがあります。「私がもう一度教えることがあれば、クラスの中で最もできない学生に特に注意を払うつもりだ。それができれば、私は教師として成功できると確信する」というものです。一人ひとりの生徒を大切にするという具体化の中に、小・中・高・大があるということを生かして、それぞれの学生、生徒の低年齢化に合わせて、その一つ前の学校の先生のスタイルを授業方法や指導を学んでいくことが、また新たな状況への対応

ます。

高田●話が高大連携、中大連携というところに来ました。

松延●高大連携は組織化も大事だと思います。ただ、そのためには時間もかかるしプロセスも大事なので、動き出すまでに結局時間がかかる。これは当り前なのかもしれないが、大学はいろんな意味で人材豊富ですよね。本当の意味での人材交流というか、お互いを知るための交流は、今後もっとあってもいいのではないかと思います。

私たちの学校では、05年に大学経済学部の篠原総一教授のご紹介で、「経済知的フォーラム」を実施しました。現職大臣にも講義をしていただいた。昨年は、日本弁護士会主催の模擬裁判選手権に本校の生徒が参加することになり、大学法学部岡田幸宏教授に模擬裁判に関する指導をしていただいたり、あるいは「英語でチャレンジ・ビジネスアイデアコンテスト」に参加するにあたり、大学商学部

になるのではと思っています。

高田●確かに大学は高校2、3年生のみに目を向けているように思います。本当は好奇心が育つてモチベーションが上がる中学生に対するアピールが非常に大事ですね。

山崎●高大連携は同志社以外にもいろんな形でやっていると思うんですね。しかし大学の先生が、何が研究の最先端かを中学生に分かりやすい形で教えるというのは、実際にはどうもうまく行っていないです。高校と大学の教員が一緒にになり、どういったものを大学の先生が、どんな形で提供することが高校の生徒の関心を引き、理解を導くのか。高大連携は両方が一緒になって築いていかないとうまく機能しないというのが、ここ数年はつきりしてきています。

同志社の場合は、それに早くから気付いてやってきたんですね。特に理工学部は、とりわけ電気系などで実験教室を使い、生徒の理解度に応じた方法を、何度も打ち合わせをしながら築いてきました。今までそれを本校では大学のサーピ

も個人のつながりから実現できたものでした。英語科も、同志社大学の英文学科の先生方とつながりがありますので、教材開発でお世話になったり、あるいは今は、中・高校の教員が英文学科の講義に、いわゆる教育実習などはやはり現場の先生がした方がいいという形でお話をいただき、我々が行つて大学で講義を行うとか、そういう形での交流は徐々にですが増えていくのかなと。これだけ人的財産があるので、これを利用しない手はありません。

山崎●四つの学校の教務主任がいつでも連絡を取り合いながら、前年度の反省もしつつ高大連携が進んできたのがここ数年の実情だと思いますし、やはりフットワーク軽く何でもやるというのが学内の強みではないかなと思います。

坂下●いま具体的な連携について各校が「こんな点違います」と言っているわけですが、一つの法人内の中学・高校という視点で見ると、ああ、同志社の学校だなあと（笑）。色合いは少しずつ違いますが、それぞれ突出するところはあっても、同志社という一つのやわらかい雰囲気

気の中にすべての学校が共存している。自由でのびやかな学びをどれだけ具体的に実質的なものにしていくかということ、懸命に各学校がやっている。それは地域によって、あるいは対象となる生徒によって少しずつ違っている。

松延●表現方法が違うということですね。

教職員のチーム力向上も 魅力的な学校づくりへの課題

高田●最後に、各学校のワンポイントアピール、今後の課題のおさらいなどをお願いします。

竹山●私は学校運営の課題という観点からお話します。今後の課題としては、教職員のチーム力とリスク管理に関わる確で迅速な判断が重要だと感じています。私学の独自性やキリスト教主義学校の意義などは、創立者新島襄のめざした教育を実現する上で重要な、学校の存立基盤に関わるテーマです。現在、たとえば全国学力テスト問題などに見られるように、文部科学省の打ち出したやり方を安易に受け入れていくのではなく、どの

ように私学の独自性と建学の精神を反映させていくのかを解釈して打ち出していくのか。これは教育上も経営上も、全国の私立の中・高連合会でかなり真剣に考えられています。本校の校長も校長会などで積極的に発言していますし、キリスト教学校教育同盟でも、キリスト教主義学校が戦前に国家とキリスト教主義教育の理念、信仰との狭間で苦渋の歴史を通じてきたことを踏まえ、どのように現代的な課題に対処すべきかということも研修会で検討されている。そういう集まりにできるだけ参加し、真剣に取り組んでおられる経営者の先生方や現場の先生方とつながりを作り、情報を得る。それをつかんでキリスト教主義を基本にした私立学校として、一つひとつの課題に対してどのように賢明な判断をすべきなのかが求められる時代だと思います。

もう一つは、この間、生徒や保護者の変化に関わって、特別支援教育の実施・充実も求められてきています。この点については理事長がその意義と重要性を認められて、いち早く判断してくださいました。特別支援教育指導員の制度も、ま

だ改善の余地は残されていますが、本校で始めた制度が他の学内校にも広がってきています。生徒指導の対応、その他のリスク管理については、討議の場を保障しつつ迅速な対応が求められます。それには教職員会議だけでは関係者のチームでの会議を行い、臨機応変に対応するスキルを磨いていくことが求められている。そういうチーム力と調整機能をいかに作り出しているか。それは教員だけではなく、これからの時代は事務職員のスキル・組織力のアップも課題でしょう。

坂下●先ほども申しあげましたが、本校の場合、それぞれの生徒の履歴、経験は違い、各自が得てきているものも違う。一列に並ばされていないという経験をしています。そういう意味では非常に強い個性を持っているものですから、日本の枠に生徒たちがはめ込まれるのではなく、日本の中にある大きな本校の枠組みの中で、形も色も違うパズルのピースがちよつとずつ形を変えながらかみ合っていくところが、本校の雰囲気ではないかと思っています。一色ではないハーモニ

ーの美しさ。それが新島襄の言っていた「個儼不羈」の精神につながっていくのではないかと。そういう意味で本校は、同志社の一つの形を体現している学校ではないかと思っています。

松延●新島襄が最初に大坂（大阪）に同志社を作りたいと考えたことは皆さんご存じと思いますが、唯一大阪にある本校としては、まずまず同志社の名を大阪に広げる役割を担っています。60周年を迎える11年度には、特別教室棟や新校舎の建設が決まっています。今後はカリキュラムの変更と同時に、見た目も美しいキャンパス、中身の伴った教育のできる学校をめざして教職員も頑張り、生徒と共に育んでいく「共育」をめざしたいと思います。

長安●同志社の四つの中・高校で、私どもだけが女子校です。共学と女子校のどちらがいいのか、これには一長一短があると思います。我々の見るかぎりでは、やはり異性の目を気にせず、のびのびと自由奔放にしていますね。これは同志社の校風でもあると思いますが、共学校以上に、家庭の雰囲気と同じようなものを

感じる。それから一概には言えませんが、男女共学の場合、体育祭や文化祭などで、だいたいは男子がトップに立って女子がそれをサポートするケースが多いと思いますが…。

坂下●今は女子の方がリーダーシップを取っていることも多いぐらいです（笑）。長安●そうなんですか。うちは女子だけです。から、何をするにも女子が先頭に立って行う。やる気のある生徒にとつては、無数に活躍の場がある。女子の自主性、主体性を育む学校であることをアピールしたかったのですが（笑）。

高田●それも一部は真実ですから。

山崎●うちの場合、中学校との統合は、私たちにとつても本当にどきどきするスタートなんですね。教職員のチーム力もつけないといけないし、もっと勉強しないといけないこともある。でも、答えをどこから取ってくるのではなく、自分たちで発見しながら、実のある新しい空間と時間を作りたい。校長はことあるごとに「知的空間I W A K U R A」と言っています。今まで以上に自由な学びを作っていくという意欲が私たちにはあり

ますし、期待もしてほしいと思います。

高田●本日は多岐にわたるお話を伺いました。同志社には多様な中学校、高等学校があり、そこでの多様な教育の実情が読者に届けられるのではないかと思います。今後法人内において縦横の緊密な連携・協力が重要な課題になってくることも分かりました。それがこの総合学園の強みになっていくであろうことも感じました。本日はありがとうございました。（2009年7月10日有終館担当理事室）